

天 皇 杯 受 賞

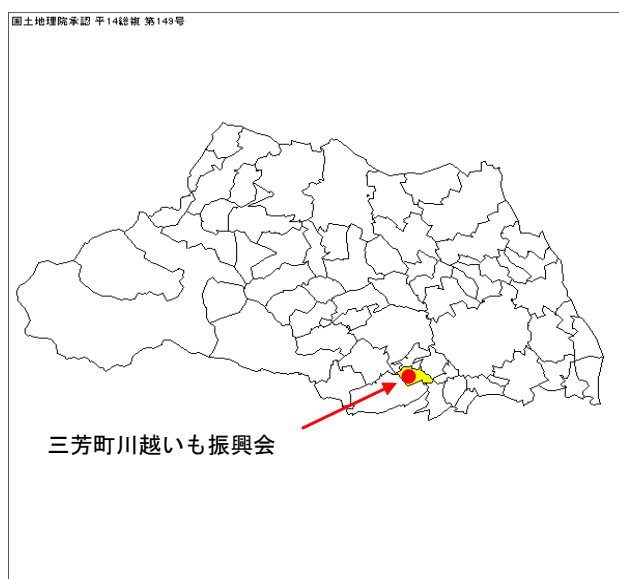
都市近郊の伝統的な循環型農法を継承する住民参加型のむらづくり

みよしまちかわごえ
受賞者 **三芳町川越いも振興会**
いるまぐん みよしまち
(埼玉県入間郡三芳町)

■ 地域の沿革と概要

三芳町は、東京日本橋から30km圏内にあり、埼玉県南部の武蔵野台地の北東部に位置する。江戸時代中期に原野が開発されて以降、長期間にわたって江戸や東京の食を支える純農村地帯として歩んできた。昭和30年代頃からの高度経済成長期以降、首都近郊のベッドタウンや首都圏の流通基地としてめざましい変貌を遂げつつも、関東ローム層に覆われた平坦な台地においてサツマイモ、野菜、そば、茶等の畑作が行われており、農・商・工のバランスの取れた自然豊かな町として今日に至っている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

三芳町川越いも振興会が活動している上富地区は、三芳町の西部に位置し、総世帯数1,466戸、人口3,539人で、耕地面積は約200haと町全体の約半分を占めており、サツマイモ、野菜、茶を栽培する農家が113戸、そのうち専業農家が65.5%となっている。上富地区は、隣接する所沢市の中富地区と下富地区とともに、江戸時代中期（1694年）に川越藩主柳沢吉保により開発された三富新田と呼ばれる地域を形成しており、上富地区の歴史は、91戸の村が成立した時から始まっている。

第1表 農業の概要（三芳町全体）

（単位：戸、ha、千万円、％）

			平成7年	平成12年	平成17年	最 近 年			備 考
						22年	対 7 年 比	構成比	
農 家 数	専 兼 別	総世帯数	11,648	12,118	12,904	13,940	119.7	100.0	農業後継者確保率 — %
		農家数	363	325	297	273	75.2	2.0	専 業 — %
		販売農家数	345	302	275	238	69.0	1.7	I 兼 — %
	内 訳	専 業	122	124	107	131	107.4	0.9	主 業 99 %
		I 兼	114	85	57	44	38.6	0.3	準主業 76 %
	1	II 兼	109	93	111	63	57.8	0.5	認定農業者数（うち法人） 87人（ 1 ）
	内 訳	主 業	228	197	147	158	69.3	1.1	基幹農業従事者数 男子 329 名 女子 263 名
		準主業	63	64	77	49	77.8	0.4	
	2	副業的	54	41	51	31	57.4	0.2	
			非農家数	11,285	11,793	12,607	13,667	121.1	98.0
等	規 模 別 農 家 数	0.5 ha 未満	50	26	20	11	22		戸当たり平均耕作規模 1.54 ha
		0.5～1ha未満	84	72	64	55	65.5		
		1～2ha 未満	159	130	119	106	66.7		
		2 ha 以上	70	74	72	67	95.7		
耕 地 面 積 等	耕 地		537	523	521	513	95.5		地区面積 1,530 ha
	内 訳	田	—	—	—	—	—		耕地率 33.5 %
		普通畑	518	506	503	513	95.5		林野率 13.0 %
		樹園地	19	17	18				ほ場整備率
		牧草地	—	—	—				田 — %
	採草牧草地	—	—	—	—			—	畑 98 %
								利用権設定率 0.5 %	
作 付 面 積 等	ばれいしょ		40	44	6	8	105.0	主な経営類型 普通作、野菜の単一経営	
	かんしょ				37	34			
	露地野菜		376	321	327	264	70.2		
農 業 産 出 額	戸当たり農業産出額								
	— 百万円								

資料：世帯数は国勢調査、農家数は農林業センサス、耕地面積及び作付面積は作物統計調査

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 歴史の継承 ～元禄時代からの伝統農法～

川越藩主柳沢吉保は、江戸時代初期まで萱野原^{かやのはら}であった入会地^{いりあいち}を新田開発した。この開発では、幅6間（約10.8m）の道を縦横に開き、道の両側を間口40間（約72m）奥行375間（約675m）の短冊状に区画し、1戸当たり約5haの土地を配分した。土地の地割は、道路に面した表側を屋敷地、その次を耕地、一番奥を平地林（ヤマ）とされ、平地林（ヤマ）の落ち葉を堆肥とすることで、関東ローム層のやせた土地を豊かにして農業を行うことができる仕組みとなっている。開発当初、用水を引くことも考えられたようであるが実現せず、その後約50年間はヒエ、アワ、ソバ、大豆等が栽培されていた。

寛延4年（1751年）頃、上富地区周辺にサツマイモが伝わり、文化文政期（1804から1829年）には、貴重な換金作物として主要作物となった。落ち葉堆肥で作られたこの地区のサツマイモは、新河岸川の舟運により江戸に運ばれ、「おいしい川越地方のいも」＝「川越いも」のブランド名で全国にその名が広がっていった。こうして、平地林（ヤマ）から落ち葉を堆肥として耕地に施肥し、そこで栽培されたサツマイモを江戸で売り、得た資金で生活が潤い、また落ち葉が取れるように平地林（ヤマ）を管理して守るという循環型農法が確立していった。

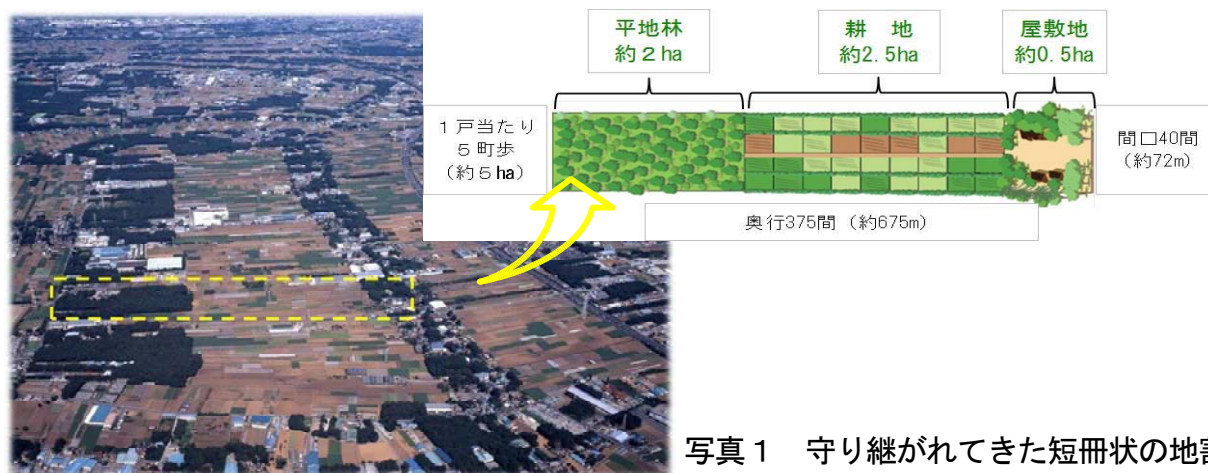


写真1 守り継がれてきた短冊状の地割

イ 高度経済成長期とサツマイモ栽培の危機

高度経済成長期に入り、急激な化学肥料の普及などにより平地林（ヤマ）由来の落ち葉堆肥や薪炭材等の利用が少なくなるとともに、都心のベッドタウンとして住宅開発の波が押し寄せた。それに加えて、関越自動車道が開通し、流通関係の営業所や工場、倉庫が進出したことにより平地林（ヤマ）は減少し、活用されない平地林（ヤマ）も多く見られるようになった。当時、サツマイモは市場出荷が主流であり、落ち葉堆肥を使った品質の高いサツマイモは生産コストに見合う価格では売れなかったため、葉物野菜に作目転換する農家が現れてサツマイモの生産量

が減少するようになった。このことによって、地域の人は伝統的な農法に支えられた江戸時代から続くサツマイモの産地としての存続について、危機感を抱くようになった。

このような状況の下、市場出荷以外の販売方法がないか模索していたある農家が昭和50年頃に「手書きの看板」を設置してサツマイモの直売を始めたところ、ある企業から「お歳暮用に泥付きのサツマイモを使いたい」との話が持ち込まれた。泥付きでのサツマイモ販売を実際に始めてみると、「泥付きのままであることから日持ちも良く、サツマイモの色もきれいで味も良い」と口コミで評判が広がり、取扱企業が3社4社と増えていった。このことがきっかけで、最初に直売を始めた農家は、市場出荷よりも高く売れて手間もかからない直売を周辺のサツマイモ生産農家に勧めるとともに、上富地区で美味しいサツマイモの直売ができる基盤を作る努力を続けた。しかし、地域のサツマイモ生産農家の大半は「いつ買いに来てくれるかわからない直売よりも市場に出荷した方が確実に売れる」との考えから直売農家は急激に増えず、10年ほどが経過しても直売を行う農家は4戸のみだった。

ウ 三芳町川越いも振興会の設立と全員参加の地域ブランドづくり

初期に直売を始めた4戸の農家は、上富地区の川越いもを地域ブランド化するためには少人数の取組では限界があり、地区のサツマイモ生産農家全員が直売に取り組む必要があるとの考えの下、直売を行う組織づくりのため、周りのサツマイモ生産農家の説得を始めた。上富地区は畑作地域で、個々の農家が販路拡大を図り、農家が自立した地域であるため、説得には3年の月日を費やしたものの、1年の準備期間を経て、平成4年12月に「三芳町川越いも振興会」（以下「いも振興会」という。）を立ち上げた。

いも振興会は、上富地区のサツマイモ生産農家31戸が会員となり、人望があって行政にも顔の利く早川宏さんを初代会長として、活動がスタートした。いも振興会では、地域ブランド化に向けた最初の取組として、統一ブランド名が入った段ボール箱を作成し、サツマイモをその段ボールに入れて販売することとした。

エ 上富地区を「サツマイモ産地」として全国に

上富地区をサツマイモの産地としてより認知してもらうために^{のぼり}幟を作成し、サツマイモの販売時期には会員全員で幟を掲げる取組を始めた。けやき並木通り（長さ約1.2km）は200本ほどの幟で埋め尽くされ、マスコミにも取り上げられるようになったことから、平成10年頃からこの通りは「いも街道」と呼ばれるようになり、今ではすっかりその呼び名が定着している。

上富地区のサツマイモは、江戸時代、文化15年（1818年）には「いも味良し…『富^{とめ}のいも』」と紀行文にうたわれるほどの名産品になっていた。その後、江戸での焼き芋の流行により「栗（九里）より（四里）う

まい十三里」という言葉（当時、美味しいサツマイモの産地として知られていた川越が、日本橋から十三里（約52km）の距離にあることから生まれたと言われている。）とともに、「川越いも」の名で全国にまで広がっていったが、この地区の生産者には「元祖『川越いも』といえば『富のいも』である」との自負がある。

しかし、上富地区のサツマイモを全国に売り出すに当たり、上富地区以外で栽培されたサツマイモも「川越いも」として市場に出回っていたことから、これらと区別するため、平成16年に「富の川越いも」を商標登録した。段ボール箱や幟のデザインを改めて統一することによって、上富地区で生産されたサツマイモを地域ブランドとしている。そして、いも振興会では、サツマイモの地域ブランド化を進めるためには、更なる品質の向上を目指すこと、上富地区全体で均一な品質であること、そして量産体制を整えることが必要と考え、全国のサツマイモ産地に先駆けてウイルスフリー苗の導入に取り組むこととした。

オ 幻の品種「紅赤」と伝統農法

上富地区で栽培される「川越いも」といえば、鮮やかな紅色で食味が良い「紅赤」という品種が有名である。明治初期に、旧浦和市（現さいたま市）で発見された「紅赤」は、かつては「金時」とも呼ばれて広い地域で栽培され、ホクホクとした食味と皮が鮮やかな紅色であることが特徴で、評判も高かった。しかし、品質が安定しないなど栽培が難しく、昭和59年に開発された「ベニアズマ」等の新しい品種に取って代われ、昭和60年には全国の栽培面積の7.2%を占めていたものが、平成22年には1.1%にまで減少している。幻の品種となってしまった「紅赤」は、落ち葉堆肥を使用する伝統農法が継続されているからこそ、高品質・良食味を可能にしていると言っても過言ではない。いも振興会は、「紅赤」のウイルスフリー苗の生産に当たり、上富地区で生産されていた「紅赤」の優良系統選抜を行い、イモの形状、揃い、色等を比較して優良な4種類を選び、生産・販売を行いながら、評価・検討を繰り返した。その結果、平成15年には上富地区で生産される「紅赤」は最も優良な1種類に絞り込まれている。

（2）むらづくりの推進体制

ア 三芳町川越いも振興会の概要

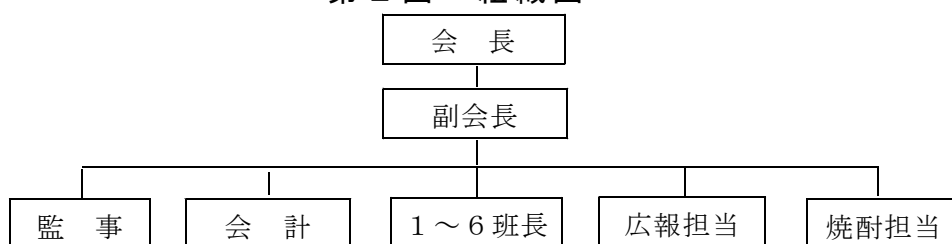
いも振興会の会員は現在29戸で、上富地区のサツマイモ生産農家がほぼ参加している。会を運営する役員は、会長1名、副会長1名、監事2名、会計1名、地区を6つに分けた班で構成されている。



写真2 三芳町川越いも振興会の皆さん

栽培するサツマイモの高品質化と農業後継者の育成・確保により、農業経営の安定に寄与することを目的に活動している。

第2図 組織図



イ いも振興会の地域での活躍

いも振興会では、地区の小学校で「農業体験学習会」を年2回実施するほか、「産業祭」や「収穫祭」に出展しており、地域住民を始めとする都市住民との交流等地域の連携が必要な事業において、中心的な役割を果たしている。いも振興会が平地林（ヤマ）で行う「落ち葉掃き体験」や「世界一のいも掘りまつり」は、町外の都市住民も参加するが、集落の子供たちが多数参加しており、地域のイベントとして定着している。そのほか、三芳町が主催するイベントにおいても、いも振興会会長が実行委員会会長を務めるなど、地域づくりの要として積極的に参加している。

ウ いも振興会と後継者グループの設立

いも振興会の活動に触発された後継者世代が、サツマイモに加え、新たな農業の可能性を研究するため、新たに2つの組織を設立した。両グループは、いも振興会の会員が中心となって設立しており、サツマイモの栽培から派生してサツマイモ以外のブランド化など、いも振興会と連携して様々な活動に取り組んでおり、世代間の絆も強い。

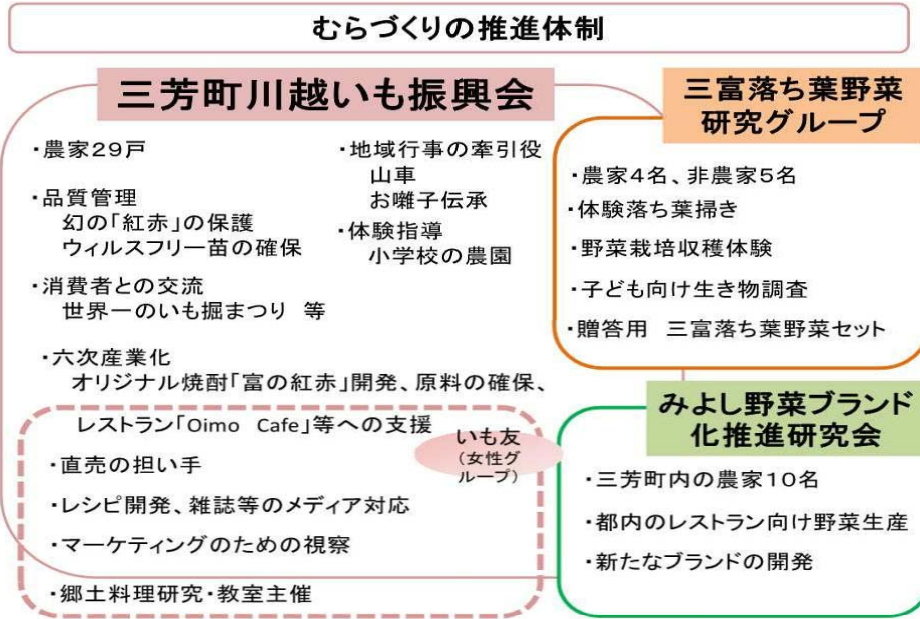
① 三富落ち葉野菜研究グループ（平成10年設立、会員9名）。

農業と三富新田の歴史、文化及び環境を継承・発展させることを目的としている。都市住民による体験落ち葉掃き、野菜栽培収穫体験等を主体的に行っている。

② みよし野菜ブランド化推進研究会（平成24年設立、会員10名）。

安全安心で高品質な農産物等の生産を行い、みよし野菜のイメージ戦略を具体的に推進することを目的としている。都内レストラン向け野菜の生産やマルシェでのPR等を実施している。

第3図 むらづくりの推進体制



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

東京から30km圏内という大消費地に位置する地の利を最大限に活かすことで、伝統農法を守りながら、直売等を展開している。このようないも振興会の活動が核となって、経済的にも自然環境的にも豊かな地域づくりが実現している。

2. 農業生産面における特徴

(1) 生産状況の変化

いも振興会が設立される前までは、上富地区においてもサツマイモの生産面積は減少傾向にあったが、いも振興会のブランド化の推進等の取組により生産面積は増加に転じている。ウイルスフリー苗の導入により収量が安定し、単収は3割ほど増加した。

また、ねっとりした食感等消費者の嗜好の変化に合わせ、新たなサツマイモ品種の導入にも取り組んでいる。上富地区における平成27年の作付面積割合は、「シルクスイート」が10.7%、「べにはるか」が6.3%と、5年前と比較して新しい品種が大幅に増加している。

さらに、いも振興会の会員の中には昔からの育苗方法である「さつま床」による育苗を行っている者もあり、ウイルスフリー苗と併存させることで苗の確実な供給ができる体制を整えている。

(2) 女性の活躍 ～直売の担い手から新しい価値の発信へ～

直売所での販売では、陳列の工夫やPOPの作成、接客などで女性の活躍がめざましい。女性は、お客さんとの会話を楽しむ中で消費者ニーズを把握したり、よりおいしく食べるための情報を相互に交換したりするなど、

販売促進につながる重要な役割を担っている。商品のサツマイモには、サツマイモ料理のレシピや品種の説明文（特徴や保存方法など）を添えるなどの工夫を凝らした販売を行っている。

いも振興会の女性は、上富地区の非農家の女性も含めてお互いに情報の交換や共有を頻繁に行い、女性グループとして特段の組織化はしていないが、世代の枠もいも振興会の枠も軽やかに飛び越え、柔軟な発想でカフェ作りやメディア対応等で新しい取組を実現している。若い世代の女性たちの口コミによる集客効果も大きい。いも振興会の高橋光江さんは、これらの活動と一緒にを行う地域の非農家の若いお母さんたちを「(サツマイモが縁でできた)『いも友』なんです。」と話す。

(3) やる気あふれる担い手たち ～次のステージへ～

いも振興会の活動により、上富地区では生産したサツマイモの約8割を直売できるようになった。自分で決めた価格で販売でき、やる気につながっていること、市場に出荷するよりも収入が多いことなどの理由によって、上富地区の農家は後継者が多く、65才未満の農業就業人口の割合は、全国の39%に対して66%と非常に高い状況となっている。

また、いも振興会の活動だけでなく、平成10年には「三富落ち葉野菜研究グループ」が、平成24年には「みよし野菜ブランド化推進研究会」が後継者世代により設立された。伝統的な循環型農法を次世代や都市住民に伝えるための活動や、サツマイモにとどまらない新たな野菜のブランド化等、次のステージへの取組が次々と始まっている。

(4) 多彩な6次産業化

ア いも焼酎「富の紅赤」

いも振興会の焼酎担当が中心となり、県内の造り酒屋、酒販組合とともに紅赤を使った焼酎の製品化に取り組んでいる。3者間で原材料となる品種、規格、販売価格、販売方法などを検討して製品化し、平成18年から販売されている。いも振興会では、原料となるサツマイモの収集、ラベルデザインの選定等（首掛けは、いも振興会の伊東久子さんのデザイン）を行っており、「女性がフランス料理を食べながら飲む焼酎」というコンセプトで、臭みが無く香りが良いことから、人気の商品になっている。

イ 農家レストラン「富」、*「oimo cafe」*

農家レストラン「富」では、地元産のそば粉や「おじいちゃんの農園で採れた新鮮野菜」などを使った地産地消の料理を提供している。自家のサツマイモを使った「川越いも2色コロケ」や「富の川越いもアイス」が大好評である。

「oimo cafe」は、320年続くサツマイモ農家の後継者、武田浩太郎さんが自宅敷地内に作ったカフェで、赤ちゃん連れのお母さんたちや女子会などで常に混雑しており、平日でも予約が困難な人気店である。カフェでは、いも振興会の女性の協力により地域に伝わるサツマイモ料理な

どを提供しており、自家のサツマイモや新鮮な地元の野菜をふんだんに使ったメニューが女性客に大好評である。

ウ 芋ようかん

「べにはるか」のうまみと甘みを生かし、保存料や着色料を加えていない製品である。町の商工会に協力を仰いで試食会を複数回開催し、地元企業と共同で開発したものであり、いも振興会会員の「江戸屋弘東園」で販売している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 絶滅危惧種を守る平地林（ヤマ）

平地林（ヤマ）の落ち葉をかき集めて堆肥にした後、畑に投入する伝統農法を300年以上続けてきたことにより、一面萱野原だった上富地区が今では多種多様な作物を育てられる肥沃な土地に代わった。伝統農法によって、平地林（ヤマ）が吸収した二酸化炭素や土壌中の窒素が堆肥として畑に還元され、持続可能な農業が可能となっている。

こうした伝統農法を守り続けていることで、農地だけでなく豊かな生態系を保つ平地林（ヤマ）の環境保全にもつながっており、平地林（ヤマ）ではレッドデータブックに記載されている「キンラン」「オミナエシ」など植物7種、「ウラナミアカシジミ」「ミヤマセセリ」など昆虫18種が確認されている。

(2) 都市住民が参加できる仕組み

平地林（ヤマ）で行う落ち葉掃きはかなりの重労働で、1 haの平地林（ヤマ）で落ち葉を集めるためには大人4人で1週間かかると言われている。いも振興会で落ち葉掃きの参加者を公募したところ、多くの参加者が集まり、「平地林（ヤマ）での活動は都市住民にとって癒やしの空間で充実した時間を過ごせる」と好評だった。

落ち葉掃きを何年か繰り返し実施していると、「上富地区の落ち葉掃き」が徐々に定着し、学校や団体の研修として取り入れられるようになり、さらに口コミで人が集まるようになってきた。今では落ち葉掃きは上富地区の風物詩的な定例行事となり、三芳町主催の「体験落ち葉掃き」には100名以上の都市住民が集い、交流の場になっている。

また、いも振興会会長が実行委員会会長を務め、毎年10月に開催する「世界一のいも掘りまつり」は、短冊状の地割形状を活かして450mの長い畝うねに並んでサツマイモ掘りを行うイベントであり、東京都をはじめ神奈川県、千葉県などからも多くの人を訪れ、600名を超える人が参加する都市住民との交流を行う一大イベントとなっている。

(3) 伝統文化と観光

三芳町には、元禄時代の新田開発に始まる歴史や文化的な背景を持つ観光資源が豊富にある。上富地区では4月と8月に「木ノ宮地蔵」の祭礼が行われ、上富のお囃子が山車の上で奉納される。特に11月に隔年で開催さ

れる「上富まつり」では、いも振興会会長が実行委員として参加しており、地区で開催される祭りにはいも振興会会員も積極的に関わっている。

また、いも振興会の活動により「富の川越いも」が有名になり、それを買い求めるために町を訪れる人が増えてきた。そこで、町では、三富新田の開拓に始まる歴史や文化的ポテンシャルがある豊富な観光資源を町の観光に結びつけることができないかと考え、平成23年度に「観光のまちづくり」の研究を目的とする、職員と住民からなるプロジェクトチームを立ち上げた。そして、プロジェクトチームは町に対して「観光による町づくり」を提案し、町では平成24年度に「観光産業課」を創設した。それまで町には「観光」を冠した組織はなく、いも振興会の活動があったからこそ、行政が観光振興を町づくりの一つのツールとして定着させるに至ったといえる。



写真3 都市住民参加の落ち葉掃き



写真4 世界一のいも掘りまつり

第2表 むらづくりに関する年表

時 期	内 容
昭和50年頃	・サツマイモの直売所を始める農家が現れる
昭和60年頃	・サツマイモ直売農家が4戸に増加
平成4年12月	・三芳町川越いも振興会が設立される ・統一ブランドを印刷した段ボール箱で販売開始 ・サツマイモのウイルスフリー苗導入開始 ・紅赤の系統選抜開始
平成10年頃	・“富の川越いも” を商標登録 ・幟を作成、大々的にPR活動開始
平成11年1月	・三富新田が“にほんの里100選”の一つに選出される
平成18年	・いも神様誕生 ・いも焼酎「富の紅赤」製造開始
平成19年	・三富落ち葉野菜研究グループ設立、三富新田の歴史に裏付けされた落ち葉堆肥利用による野菜販売のPR活動開始
平成23年	・「観光のまちづくり」プロジェクトチーム発足 ・第1回世界一のいも掘りまつり開催
平成24年	・三芳町が農業振興と商業観光を担う観光産業課を設置 ・みよし野菜ブランド化推進研究会設立、みよし野菜のイメージ戦略を推進 ・第2回世界一のいも掘りまつり開催
平成25年	・第3回世界一のいも掘りまつり開催
平成26年	・第4回世界一のいも掘りまつり開催 ・ムック本「散歩の達人」掲載 ・BSプレミアム「ニッポンぶらり旅」にて放映